ある高校生探偵とある小学生科学者の恋話《こいばな》

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある高校生探偵とある小学生科学者の恋話（こいばな）

【Ｎコード】

Ｎ９１４５Ｈ

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

コナンが工藤新一に戻ってから一週間後の夏のとある日。諦めていた恋心に感情を抑えきれなくなる哀。

（前書き）

久々にコ哀……というよりは新哀ですかね？

とにかく本当に久々のコナン小説でございます。新哀なので苦手な方はご注意ください

八月二〇日。午後一時一六分。

蝉は鳴き疲れることを知らないのだろうか、延々と鳴き続け、自らを主張している真夏の午後。その真夏の日の下を二人の男女が歩いていた。

一人はぐったりとしながらべたべたとしたワイシャツを気だるそうにぱたぱたと首に指をかけて少しでも暑さを誤魔化そうと風を送っている高校生ぐらいの背丈の少年。

その隣でやれやれといったような表情をしながら歩いている小学生ぐらいの背丈の少女。その二人は恋人というにはあまりにも年が離れているし、兄妹（きょうだい）と呼ぶにはあまりにも仲が良さげだった。

小学生ぐらいの背丈の少女は歩きながら高校生ぐらいの少年に話しかけた。

「まったく、体は大人でも性格は子供のままね」

少し笑いながら話しかける少女に少年は、

「るせー、お前だって体は子供なのに婆さんみたいな性格じゃねーかよ。んで、いっつも眠そうにしてんだっての」

少女を見下ろしながら、ぐったりと答える。少女は赤みがかった茶髪を小さな指で掻き揺らす。そして、

「本当のお婆さんかもね。残念？」

「そうだな、本当に婆さんだったら孝行しねーと、……なっ！」

そう言い少年はいきなり少女を頭の上まで持ち上げると、

「ほーら、高いだろ？　お婆ちゃん」

赤ん坊でもあやすように左右に少女を揺らす。少女は嫌そうに手足をばたつかせるが子供と大人では筋力の差がありすぎた。少女の力では少年の力にはほとんど意味のない抵抗だった。

「ちょっと降ろしてよ、く、工藤（くどう）くん、」

工藤（くどう）と呼ばれた少年は満足したのか、しばらく少女で遊ぶとゆっ

くりと少女を地面に降ろした。

「ははっ、参ったか？　灰原」

灰原と呼ばれた少女は見るからに不機嫌になっていく。目の前に立つ工藤をじと目で睨みつかせながら、

「今、私が『助けてー！　誘拐されちゃう！』って言ったらどうなるかしらね」

　工藤は即座に、

「ごめんなさい」

　頭を下げた。この年で誘拐犯にはなりたくはない。

　少女に情けなく頭を下げている少年は工藤新一。巷では“高校生探偵”だなんて騒がれるほどの有名人。最近までは江戸川コナンという名前の小学生だったのだが、この目の前にいる一見ただの小学生の少女のおかげで元の体に戻ることが出来た、元小学生だ。

　少女はむすっとした表情から一変、笑みを浮かべる。

「もういいわよ、もう」

　少女は灰原哀。見かけはただの小学生なのだが、工藤新一と似た境遇の一人だ。哀は黒の組織の一員だったのだが、組織から抜け出す際に工藤新一を幼児化させた薬を飲んで体が幼児化した元、宮野志保という科学者だった。

　組織はＦＢＩの活動により壊滅したことになっている。世間にはそう伝えられているのだが、組織を壊滅させる際に二人の小学生が協力したことは伝わってはいない。世間に対する二人のための嘘をＦＢＩにいるジョディ捜査官が報道してくれたのだ。ＦＢＩの功績は世間にばれることはないというＦＢＩのルールを破ってでも。

「やっぱいいな、自分の体ってのは、」

　そういいべたべたと自分の体を触る。

「こう、愛しく感じるよな」

　工藤は嬉しそうに顔を上げると、

長い時間だった。小学生生活を工藤は五年間も過ごした。苦痛だった訳ではない。ただ鏡を見れば昨日までの顔が別人の顔になって

いる毎日がいつも窮屈だった。それが一週間ほど前までの話。
組織から二人の体を幼児化させた“ＡＰＴＸ４８６９（アポトキシン）”のデータから灰原はたった一週間で解毒薬を作り上げた。
この小さな少女はいつも罪悪感を抱えていた。自らは知らなかったこととは言え、毒薬を作っていたという事実を知った灰原はいつも死にたがっていた。それをいつも救っていたのは高校生探偵の工藤新一だった。感謝が恋心に変わるのに時間はかからなかった。
でも灰原は解毒薬を飲まなかった。それは、少女は知っていたから——少年の好きな人を。自分のせいで五年間も会えなくしてしまった自分の不甲斐なさに、だから少女は宮野志保を捨てた。
「………、」
「ん？」
急に灰原が黙り始めたので心配になった工藤が少女の顔を覗き込む。
「どうした？　腹でも痛いのか？」
少女は迷っていた。確かに宮野志保という名前は捨てた。だからこんなことを思うのは駄目なのも少女は知っていた。でも確かに少女も工藤新一が“好き”なのだ。だからいつも隣で歩いている。でもそれは、私じゃない、あの人。それは分かってる。
なのに、
「………、……の、さ、……」
灰原は口にしたくない。でも、口にしたい。矛盾の葛藤が灰原の頭の中で始まる。
分かってる。あの人は“天使”で私は“悪魔”——なら手を伸ばすのは悪魔じゃなくて天使なのが当たり前。でも、それでも悪魔が人に恋をすることもあるように、灰原哀も恋をしている。気持ちよりも、理屈よりも、恋心というのはどうやら強いらしい。
「……あのさ、」
灰原は俯いたまま話す。
「蘭さんとは……仲良く、……してる、の？」

工藤は少し考えて、
「んーま、仲はいいと思うけど？」
灰原の唇の端が歪む。灰原はゆっくりと顔を上げて歪んだ笑顔を浮かべる。
「そう、……なんだ。よかったわね、………うん、」
こんなに涙腺が熱くなったのはいつ以来なのだろう。でも今泣いたら工藤に見られてしまう。だから気丈に振舞う。
「たまには惚気の一つくらい聞いてあげてもいいわよ」
「惚気……ねえ？　それ無理なんじゃないか」
灰原は信じられないものでも見るかのように工藤を凝視して、
「どうして？」
聞く。
工藤は首を傾げながら、
「だって惚気ってさ、恋人とかの話だろ？　俺と蘭は恋人じゃなくて友達だしな」
目を見開いて、灰原はもう一度工藤を見る。
「だーからっ、友達だっての！　それ以上でもそれ以下でもないの！」
口元の歪みが嘘のように緩やかになっていく。嘘ではないのかと灰原はもう一度、
「友……達……？」
「そう友達……ってか、親友だな、親友」

「――――――――――、」

その瞬間、灰原の『感情』が爆発した。
それを抑えていたのは天使の存在があったから。でも、それが少しでも崩れたから。今まで抑えていた感情は灰原自身でも止めることは出来なかった。
「知ってる？」

「何を？」
「私が工藤くんのこと好きだってこと」
時間が凍結したように感じた。体中にドライアイスでも突っ込まれたように体が冷たいのか熱いのかも分からないくらいに、体が固まった。それでも思考は固まらなかった。
(何、言ってるの？　私、)
「工藤くんのこと好きなことや」
(や、めて……)
「あなたが私を助けてくれる度に私の心臓が止まりそうだったことや」
(い、……や、……)
「隣にいるだけで嬉しかったことや」
(聞かないで、……工藤くん……)
灰原の口は止まらない。
「知ってる………？」
灰原の口が止まりそうになる。それでもこの言葉は聞いてもらいたくて、
「もう一度、言う、わ。……好き、……なの、」
ははっと、少年は笑う。
灰原は恥ずかしさと後悔で死にたくなる。こんなことを自分が言うことさえ少女の頭の中には無かったことなのだろう。ずっと隣で歩きたいと思っていた。でも、それは儚い夢だったのかもしれない。それでも、自分の心のどこかに独占欲と言うものは確かに存在した。だから蘭と工藤が友達と聞いて嬉しかった。まだチャンスがあるなどと思ってしまった。でも、工藤は笑った。きっと冗談か何かだと思われたに違いない。でも、それならそれでいい。笑ってくれて

構わない。だから、終わりたくない……。だからそのまま笑ってて。
「……灰原、」
少年の声が聞こえる。俯いたまま動かない少女に優しく声をかける。
「顔……、上げてくれよ」
少女は動かない。だから少年は、

「――――――――――――――――――、！！」

少女を力強く抱きしめた。膝をつきながら少女を優しく抱きしめた。
「顔上げてくれよ、灰原……。お前の顔、見せてくれ」
言われるまま灰原は顔を上げた。顔の筋肉をどうやって動かすかも忘れたように灰原の顔は引きつっていた。青い瞳はうっすらと滲んでいた。少年は不器用に少女の涙を指で拭う。
「泣くなよ」
「泣いて……、な、い、」
そう言う少女の声は震える。それを見て少年はまた、笑う。
「ほんと……可愛げねーな」
「悪かったわね」
「でも、さ……」
少年は少女を見つめながら、
少女がずっと聞きたかった言葉を、
口にした。

「そんなお前のこと、俺も……好き、……なんだぜ？」

「…………え……？」
少女は自分の聞き間違いなのではないのかと、自分の耳と頭がおかしくなったのではないのかと、呆然とする。それが聞き違いでな

いことを少年は証明する。
「好きだ」
「……」
「好きだ」
少年が満足するまで少年は続ける。少年は顔を赤くしながら、
「嘘なんかじゃねーぞ。俺はお前のことが好きなんだ」
そう呟くと、
「……、」
ぎゅっと、少女は目をつむりながら優しく少年を抱きしめ返した。

（後書き）

いやー息抜きに書き始めたんですけど、どうだったでしょうか？
哀ちゃんの不器用さなど上手く表現出来ていたでしょうか？
作者はかなりのコ哀贔屓なので、蘭とかが不憫になるは仕方ないですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能《たんのう》してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9145h/

ある高校生探偵とある小学生科学者の恋話《こいばな》

2010年10月8日14時40分発行